

宝暦・明和頃刊行の欠題艶本の解題と翻刻

永塚憲治
上田眞生

近世にさまざまな形式で制作されてきた艶本、その総数は一説に抛れば、多く見積もった説^①では三千点を超えるとされ、少なくとも見積もった説^②では千二百点と言われており、いずれにせよおびただしい数の艶本が出版されていたことが分かっている。今回紹介する艶本は、稿者の一人の永塚が京都の古物商からネットオークションで入手したものである。

艶本に於て性典モノはしばしば見受けられ、その中で春葉（強壯剤や催淫剤等の性行為を助ける薬の総称）が登場するも、春葉の処方集というものは、他にあまり例を見ない形式の艶本である。この春葉というものは、元々中国で生まれたもので、今回の欠題艶本でも漢の武帝や陶真人（陶弘景）や唐の玄宗といった中国史上で著名な人物に由来するとされている。この艶本には、全部で二十

三の春葉を載せるが、「艶葉奇方」ではその効能・用法を、「春意奇方」ではその構成する生薬と修治などの製造に関わる記述を載せており、実用に適った形式を取っている。

全二十三の春葉の内、例えば、「固精丸」は、明の嘉靖十五年（一五三六）に刊行された房中書の『素女妙論』に載せる「固精丸」と処方名が同じで、構成する生薬もほぼ同じものが載せられている。一般に『素女妙論』と言えばヒューリックの『秘戯図考』に所収の「丙寅仲冬」の「序」を載せるもので、それではなく嘉靖十五年に刊行された『素女妙論』は、戦国時代の医師である曲直瀬道三^③によって『黄素妙論』として和語に抄訳されており、それが後に艶本や養生書に取り込まれ、近世日本の房中書の流通の中核となっている^④。春葉の研究は、房中書と艶本という共にアン

ダーグラウンドの出版物であった為か、依然として不明な点も多い^⑤。そこで今回は解題・翻刻をして江湖に問うことにした。本稿は、この知られざる日中交流の歴史を明らかにする為の基礎作業であり、諸賢の指摘・叱正を請うものである。

まずは今回、紹介する艷本の書誌を記す。

書型 横本 一冊。

表紙 緑色鳳凰唐草模様替表紙、縦一〇・二×横一五・五cm。

本文 四周単辺、縦八・九×横一三・七cm。半丁十行。毎行十字。

構成 総六十五丁存。

序二丁（丁付なし）

凡例一丁（丁付なし）

挿絵二十六丁（丁付なし）

「艷葉奇方」十四丁（丁付なし）

「春意奇方」二十二丁（丁付なし）

挿絵 首と末は半丁、中間二十四丁は見開き。

題箋 なし。

内題 「艷葉奇方」、「春意奇方」。

尾題 なし。

柱題 なし。

句読 なし。

署名 なし。

画者 未詳。

刊記 なし。

書誌備考 序の第一丁は下部が欠損。見開きの各丁の右下と左下は手擦れ・汚損で一部判読不可。

備考 絵の筆致や本の形式から見て、刊年は宝暦・明和頃か。

注

(1) 林美一「新編・好色本春画目録」『秘本を求めて』有光書房 一九七二年 二二―頁。

(2) 白倉敬彦『絵入春画艷本目録』平凡社 二〇〇七年 二―三頁。

(3) 町泉寿郎「曲直瀬道三『黄素妙論』に見る房中養生について」『ワークシヨップ 曲直瀬道三―古医書の漢文を読む―』二松学舎大学21世紀COEプログラム事務局 二〇〇九年、町泉寿郎「曲直瀬道三と『黄素妙論』」『曲直瀬道三と近世医療社会』武田科学振興財団 二〇一五年。

(4) 石上阿希「中国養生書と艷本―『黄素妙論』の受容を中心に―」『日本の春画・艷本研究』平凡社 二〇一五年。

(5) 春葉を取り扱った先行研究としては、小川陽一「金瓶梅詞話の春葉―『日用類書』による明清小説の研究―」研文出版 一九九五年、梅川純代「娼薬―中国性技法における〈食〉―」鈴木晃仁・石塚久郎編『食餌の技法』慶應義塾大学出版会 二〇〇五年、梅川純代「房中性愛技法の日中交流史―後期房中書は日本に伝わったのか―」『道教と共生思想』大河書房

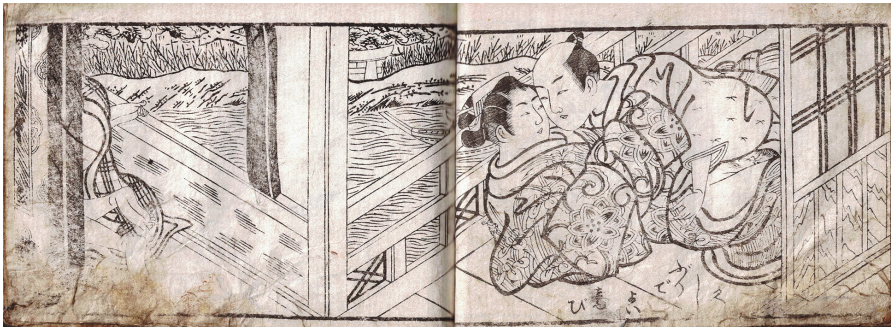
二〇〇九年、蘇玉芬「明代春葉研究」国立政治大学歴史系 碩士論文 二〇一三年 政大機構典藏 (<http://ncur.lib.nccu.edu.tw/handle/140.119/60107>) がある。

謝辞

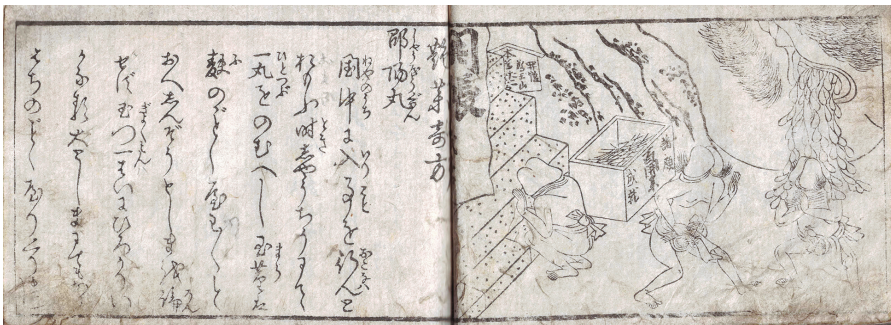
早稲田大学 教育・総合科学学術院の石上阿希講師には、本艶本の刊行年代が、宝暦・明和頃で、絵師は不明であるも、上方か上方の影響を強く承けた絵師の手になるものではないかと指摘を戴いた。記して深謝申し上げます。

凡例

翻刻の漢字は、基本 Unicode に準拠し、可能な限り原本に忠実な文字を使用した。汚損などでその行が以下読解不可の場合は、その旨を注記した。原本に句読点はないが、読解の為に、句読点を適宜補った。翻刻の下部には、平仮名を適切な漢字などに置き換えて、分かり易くしたものを配し、また生葉は漢名の下に括弧して和名を記した。



25丁裏と26丁表



巻首

翻刻

序

艶色えんしよくの道みち

をしゑを

またまたたずず（以下汚損で判別不可）

成なり袖そで（以下汚損で判別不可）

の（以下汚損で判別不可）

すみやか（以下汚損で判別不可）

大臣だいじんにす（以下汚損で判別不可）

太夫たいふ格か子しのけ岨たかき

をしたがふる

事じ、磁石じしやくの

鉄てつにむかふ

かことし。しか

はあれど、閨けい

中の真味ちゆうしんみを

得うる事たやす容易

（序第一丁裏）

（序第一丁裏）

序

艶色えんしよくの道みち

教せしへを

俟またたず

成なり袖そで

の

速すみやかに

大臣だいじんにす

太夫たいふ格か子しのけ岨たかき

をしたがふる

事じ、磁石じしやくの

鐵てつに向むかふ

が如ごとし。然しか

はあれど、閨けい

中の真味ちゆうしんみを

得うる事たやす容易

からず。いま、
婦女をよろ

(序第二丁表)

こぼしむる奇
方を集 其真
味を得ん事を謀
あはせて、其圖を
著して好人の
玩とす

(序第二丁裏)

凡例
一、初めに圖をあらはして、
笑嗚を興すの備と
す。

一、次に、二十三方の名を挙
て次第し、各方の
下に機能をあらわし、
并て用ふる法を説(以下汚損で判別不可)。
一、各味をあげて、下
は分量をしるし、

(凡例第二丁表)

からず。今、
婦女を喜

ばしむる奇
方を集め、其の眞
味を得ん事を謀り
合はせて、其の圖を
著して好ける人の
玩とす。

凡例
一、初めに圖を著し
笑嗚を興すの備へと
す。

一、次に、二十三方の名を擧げ
て次第し、各方の
下に機能を表し、
并はせて用ふる法を説
一、各味を擧げて、下
は分量を記し、

製造の法を述べ、

丸散丹の大小をい（以下汚損で判別不可）

附り交接ころのまゝ

大敵をかたふけ、男（以下汚損で判別不可）

を下んとして、薬

力を解くの法を

記す。

（凡例第一丁裏）

（艶圖二十六丁ジシノウノゾウ）

艶薬奇方

邵陽丸

閨中に入り、事を行んと

おもふ時、しやうちうにて

一丸をのむへし。玉莖は

麩のごとくやわくと

おへ、しんぞう、としまを論

製造の法を述べ

丸散丹の大小をい

附り交接心の儘

大敵を傾け、男

を下んとして、薬

力を解くの法を

記す。

艶薬奇方

邵陽丸

閨中に入り、事を行はんと

おもふ時、焼酎にて

一丸を飲むべし。玉莖は

麩の如く柔々と

生へ、新造、年増を論

せず、玉門ぎよくもん一はいにひろかり、い
かなる大としまにても、あら
はちのごとくやりくりきし

(艶薬奇方第一丁表)

み、たとひ、一日一夜たゝかふ

とも、ういぢんのほこさ(以下汚損で判別不可)

にことならず。婦女をんなたんに

にふせしめ、男精おとこせいをくだ

さんと思おもは、熟棗なつめ二ツ

斗食はかりくふべし。されども

下くだらすんば、水みづにて手てを

あらふべし。たちまち

精せいのくだる事めう妙也。

百戦丹ひやくせんたん

(艶薬奇方第二丁裏)

此くすりをもち用ふる時は、女

をあふのけにねさせ、よに

いふ四つかいといふとりくミ

に、玉莖たまきんを玉門ぎよくもんへのぞませ

をき、此くすり一粒りゅうを口に

ふくみ、息いきのもれぬやう

ぜず、玉門ぎよくもんいつばいに廣ひろがり、如い
かなる大年増としまにても、新あら
鉢ばちの如く遣やり繰くりりまじ

み、譬たとひ、一日一夜戦よたかふ

とも、初陣はつじんの矛ほこさ

に異ことならず。婦女をんな單

に伏ふせしめ、男精おとこせいを下くだ

さんと思おもはば、熟棗なつめ二ツ

許ほり食くふべし。されども

下くだらすんば、水みづにて手てを

あらふべし。忽たちち

精せいのくだる事めう妙也。

百戦丹ひやくせんたん

百戦丹

此薬くすりを用ふる時は、女

を仰あふ向けに寝ねさせ、世よに

言いふ四番つがひといふ取組とりぐみ

に、玉莖たまきんを玉門ぎよくもんへ臨まませ

置き、此薬くすり一粒りゅうを口に

含ふくみ、息いきの漏もれぬやう

直に口をすふべし。いか

やうのやぶれかたき（以下汚損で判別不可）
も、なかくけんごにまもる

事かなはず、年月男（以下汚損で判別不可）

あはざる女のごとく、はな

いきあらく、手あし

ちぢめ、かほをすりつけ

ウ、スウト、うめき快

をかまはずつきまわせば、

のちにハ、いろくのたわ言

をい、幾回ともなく氣

をやり、中くはなさん

けしきハなし。男も

よき程にたのしみ、氣を

やらんと思ふ時、水を一口

のむべし。奇妙く。

興陽丹

玉莖の頭にぬり事を

行へば、久しくたゝかふ

（艶葉奇方第二丁表）

直に口を吸ふべし。何如

やうの破れ難き

も、中々堅固に守る

事適はず、年月男

逢はざる女のごとく、鼻

息荒く、手足

縮め、顔を擦り付け

うう、すうと、呻き快ふ

を構はず突き回せば

後には、色々の戯言

を言ひ、幾回ともなく氣

を遣り、中々放さん

氣色は無し。男も

よき程に樂しみ、氣を

遣らんと思ふ時、水を一口

飲むべし。奇妙奇妙。

興陽丹

玉莖の頭に塗り事を

行へば、久しく戦ふ

ともつかれず、女よろこぶ
事かぎりなし。

鉄鎗丸
てつそうぐわん

女をいだしよせ、人差し指
と中指の間に一りうを

はさみ、くじりながらに

玉門のうちに入、しはらく

はなしなどをしかけ

口をすいなどして、薬の

そろくくと解かゝるに

したが、女こらへかねて

玉莖をにぎり、いだしめ、

さすがにはやく入ても

いわず身をもがく。其の

時、そろくと入れかけ、いか

にも心しづかにこしをつかふ

べし。玉莖常より

一倍ふとくたくましく、

女人喜悦いふ斗なし。

(艶薬奇方第三丁表)

とも疲れず、女喜ぶ
事限り無し。

鉄鎗丸
てつそうぐわん

女を抱き寄せ、人差し指
と中指の間に一粒を

挟み、挟りながらに

玉門の内に入れ、少頃

話などを仕掛け

口を吸ひなどして、薬の

そろそろと解かかるに

したが、女堪へかねて

玉莖を握り、抱きしめ

流石に速く入れてとも

言はず身を藻掻く。其の

時、そろそろと入れかけ、如何

にも心静かに腰を使ふ

べし。玉莖常より

一倍太く遅しく、

女人喜悦言ふ計り無し。

(艶薬奇方第三丁裏)

雙美圓

唾津にてとき、少斗を

陰戸のうちに入れる

時ハ、男女ともはなはたこゝち

よく久しくたのしむ

事妙なり。

玉連環

津にてねり、龜頭に

ぬり行へば、女の陰水汲

出るかごとく、たかいにいく

度氣をやりても、はじめ

入たるまゝにて、ぬける事

なく幾度もおへかゑり

く、夜あかしたのしむ

ともぬけす。しまわんと思ハ、

水一滴を吞べし。

窄陰子

女によくいゝふくめ、一りう

つはきにうるほし、馬口の

(艶葉奇方第四丁表)

雙美圓

唾津にて溶き、少し許りを

陰戸の内に入れる

時は、男女共甚だ心地

よく久しく楽しむ

事妙なり。

玉連環

津にて練り、龜頭に

塗り行へば、女の陰水汲

出るかごとく、互ひに幾く

度氣を遣りても、初め

入りたるままにて、抜ける事

無く幾度も生へ返り

生へ返り、夜明かし楽しむ

とも抜けず。仕舞はんと思はば

水一滴を吞むべし。

窄陰子

女によく言ひ含め、一粒

唾に潤し、馬口の

内へ入置。しはらくして、
馬口の内熱くかゆき
やうになりたる時、宗筋
をおし入るゝに、誠に
十二、三の童女子にひと
し。陰門はなはたひろく、
終に一はいなる道具に

(艶薬奇方第五丁表)

あはず、一度まじわりたる
男ハ、ひろきにこりて見
ぬ顔する程の大開なり
とも、きんちやくの口をメたる
やうにセまく、水あげの
はじめのごとく、一生になき
思ひ出をさする奇方也。
長想子

これを莖にぬりて、しつか
にやりくりすれば、言語に
述べたきあぢわい出、女かぎり
もなく氣をやり、性根を

(艶薬奇方第五丁裏)

内へ入れ置く。少頃して、
馬口の内熱く痒き
やうになりたる時、宗筋
を押し入るるに、誠に
十二、三の童女子に等
し。陰門甚だ廣く、
終にいつばいなる道具に

合はず、一度交はりたる
男は、廣きに懲りて見
ぬ顔する程の大開なり
とも、巾着の口を締たる
やうに狭く、水揚の
初めのごとく、一生に無き
思ひ出をさする奇方也。
長想子

これを莖に塗りて、静か
に遣り繰りすれば、言語に
述べた難き味はひ出で、女限り
も無く氣を遣り、性根を

うしない、一儀をしまいで

はなはだくだびれ、大に酒に

酔たるごとく、一日二日も

うつゝのやうになり、よう

やく常の心地になり、

逢たる男を思ひ出し、

やるせなく逢たがり、

朝夕に付きまとふて、一（以下汚損で判別不可）

（艶薬奇方第六丁表）

其男をわするゝなし。

浴爐方

煎汁にて陰戸を洗へば、

たとひこしけ有女にても、

しごくきれいに少しも

くさみなく、玉門あたゝか

になり、つねの湯あがり

百倍の味を出す。

貼臍膏

丸子を臍の中へ入、油紙

をもつて蓋とし、絹の紐

（艶薬奇方第六丁裏）

失ひ、一儀を仕舞ひて

甚だ草臥れ、大いに酒に

酔ひたる如く、一日二日も

現のやうになり、漸

く常の心地になり、

逢たる男を思ひ出し

遣る瀬無く逢たがり、

朝夕に付き纏うて、一

其の男を忘るる無し。

浴爐方

煎汁にて陰戸を洗へば、

譬ひ帶下有る女にても、

至極綺麗に少しも

臭み無く、玉門暖か

になり、常の湯上がり

百倍の味はひを出す。

貼臍膏

丸子を臍の中へ入れ、油紙

を以て蓋とし、絹の紐

にてしつかりとゆひ、いかほど
身をもミてもとけぬやうに
し、さて、女にむかふ玉莖、
金鐵のごとくてきを悦ば
しむる事、比類あるべから
ず。常くハ人がらよく、只
いくくと、しのびなきに悦
てきなりとも、此の薬力に逢
へハ、前後をわきまへず

聲を立て、謔言を發

し、陰水泉のわくに

同じ。かやうの女十人

を行ふとも、少もひるむ事

なし。此方を用ゐる時は、

二間、三間も人を遠て行ふ

べし。悦びに堪へず、われしら

ずに聲高になる事

うたかいなし。はたさんと

思ふ時、水一口呑めハ解也。

(艶薬奇方第七丁表)

にて確りと結ひ、如何ほど
身を揉みても解けぬやうに
し、さて、女に向ふ玉莖、
金鐵の如く敵を悦ば
しむる事、比類有るべから
ず。常々は人柄よく、只
いくくと、忍び泣きに悦ぶ
敵なりとも、此の薬力に逢
へば、前後を辨へず

聲を立て、謔言を發

し、陰水泉の湧くに

同じ。斯様の女十人

を行ふとも、少しも怯む事

無し。此方を用ゐる時は、

二間、三間も人を遠ざけて行ふ

べし。悦びに堪へず、我知ら

ずに聲高になる事

疑ひ無し。果たさんと

思ふ時、水一口呑めば解くる也。

(艶薬奇方第七丁裏)

四時雙美方

春夏秋冬、ともに身を

はなさず懐中し、事に

のそむ時、津にとのへ陰門

の内へ入、并に玉莖にぬり

行へば、男女とも、其快美

いゝ尽すべからず。

立功丸

かけ目五分、すきはらに

酒にて飲ミ、何なりとも、

乾きたる物を食ひて薬

をおさへ、又少斗をつばき

にねやし、玉戸の内に

入事を行へば、いよく

かたくして、いくたひか

おこなふとも、互にくたひれ

なく少も倦事なし。

精を泄んとする時、水を

のむべし。

固精丸

四時雙美方

春夏秋冬、ともに身を

はなさず懐中し、事に

臨む時、津に調へ陰門

の内へ入れ、并びに玉莖に塗り

行へば、男女共、其の快美

言ひ盡くすべからず。

立功丸

掛け目五分、空き腹に

酒にて飲ミ、何なりとも

乾きたる物を食ひて薬

を抑へ、又少し許りを唾

に粘し、玉戸の内に

入れる事を行へば、いよいよ

堅くして、幾度か

行ふとも、互ひに草臥れ

なく少しも倦く事無し。

精を泄さんとする時、水を

飲むべし。

固精丸

(艶薬奇方第八丁裏)

空心すきはらに三十粒、酒さけにて吞のむ
 べし。事ことを行おこなふに、終日ひめしよ晝
もすがら夜少よしも勢へおとろへず。陰莖
ちいさくしんぞう夜少よしも勢へおとろへず。大年
ま増の大開まも同じやうに
おぼ覚ゆる。小莖こまらなり共とも、忽たちまち
ふとふとくたくましく成なり、
こども子共こども十人そだてたる乳母うは
あふに逢あふにも、玉門たまかまにわだかまる
ほど程ほどの大道具だうくと變へんじ、

(艶薬奇方第九丁表)

てきをうれしがらす
 事こと、よのつねの艶薬えんやくの
およ及ぶ所ところにあらす。秘中ひちゆうの
ひ秘ひにして、古今ここんどく獨歩どくほ
しんぱう神方しんぱうなり。
さうやうたん壯陽丹
みぎ右十粒みぎ、生姜湯しやうがゆにて用もち
ほほのなか女ににも陰中いれへ入いれさせて、
ひと一ひとね入りしてのちに

(艶薬奇方第九丁裏)

空心すきはらに三十粒、酒さけにて吞のむ
 べし。事ことを行おこなふに、終日ひめしよ晝
もすがら夜少よしも勢へおとろへず。陰莖
ちいさくしんぞう夜少よしも勢へおとろへず。大年
ま増の大開まも同じやうに
おぼ覚ゆる。小莖こまらなり共とも、忽たちまち
ふとふとくたくましく成なり、
こども子共こども十人そだてたる乳母うは
あふに逢あふにも、玉門たまかまに蟠わだかま
ほど程ほどの大道具だうくと變へんじ

てきをうれしがらす
 事こと、世よの常つねの艶薬えんやくの
およ及ぶ所ところに非あらず。秘中ひちゆうの
ひ秘ひにして、古今ここんどく獨歩どくほ
しんぱう神方しんぱうなり。
さうやうたん壯陽丹
みぎ右十粒みぎ、生姜湯しやうがゆにて用もち
ほほのなか女ににも陰中いれへ入いれさせて、
ひと一ひとね入りして後に

事を行ふべし。玉莖

(艷藥奇方第九丁裏)

に大筋を起し、やハらかにふくれ上り、女陰の内も格別に景色を生じて、互の喜悅とき尽しがたし。男精を下んと思は、太息三度してたちまち下る。

牽情方

右の末藥を、人の見ぬやうに茶か酒か、又は

(艷藥奇方第十丁表)

白湯などの内へはじき入、是を女に興ふれハ、婦女たちまち淫心を發て、男をしたふ事神妙也。その時事を行へハ、一生その男をわすれず、起臥に恋したふころはなれず。奇功いふべからず。

事を行ふべし。玉莖

(艷藥奇方第九丁裏)

に大筋を起し、柔らかに膨れ上り、女陰の内も格別に景色を生じて、互ひの喜悅説き盡し難し。男精を下さんと思はば、太息三度してたちまち下る。

牽情方

右の末藥を、人の見ぬやうに茶か酒か、又は

(艷藥奇方第十丁表)

白湯などの内へ弾き入、是を女に興ふれば、女忽ち淫心を發して男を慕ふ事神妙也。その時事を行へば、一生その男を忘れず、起臥に戀慕ふ心離れず。奇功言ふべからず。

姿情散

唾つばきに和わし、未八つまへ前九つすま午後にに

(艶薬奇方第十丁裏)

尿へつこにぬり置おき、夜よにいたりて

閨中ねまに入り、行いはんと思おもふ少

前まかた、茶ちやにてあらいさり、

直すくに事ことを行いふべし。通とほ夜ぼし

精せいもれず、女よめよろこぶ事

たぐいなし。度たびく行いふ

て、ししぜんと薬やく力りき散さんずれば、

おおのつから精せいもれるなり。

浴盆湯

右みぎの煎湯せんとうにて、男おとこ女めともに

(艶薬奇方第十一丁表)

沐浴もくよくして身みを淨きよめ、なら

びに屎へんこをよよくく洗あらひ

ああたゝむれば、陰いん茎せうをおおお大だい

にし、陰門いんもんを狭隘せまにして、

其その快美きよみかきりなし。

秘妙散

一丸ひとま、陰戸いんこの内うちへ入いて事ことを

姿情散

唾つばきに和わし、未八つまへ前九つすま午後にに

(艶薬奇方第十丁裏)

尿へつこに塗ぬり置おき、夜よに至いたりて

閨中ねまに入り、行いはんと思おもふ少

前まかた、茶ちやにて洗あらひ去さり、

直すくに事ことを行いふべし。通とほ夜ぼし

精せい漏もれず、女よめ喜よろこぶ事

類たぐひ無なし。度たび々々行いふ

て、自しぜんと薬やく力りき散さんずれば、

自おづから精せい漏もれるなり。

浴盆湯

右みぎの煎湯せんたうにて、男おとこ女め共ともに

(艶薬奇方第十一丁表)

沐浴もくよくして身みを淨きよめ、并なら

びに屎へんこをよよくく洗あらひ

ああたゝむれば、陰いん茎せうをおおお大だい

にし、陰門いんもんを狭隘せまにして、

其その快美きよみ限かぎり無なし。

秘妙散

一丸ひとま、陰戸いんこの内うちへ入いれて事ことを

行へハ、未男に逢ハざる少女
も子宮をひらき、一物の出
入年増のごとく、初て行

(艶葉奇方第十一丁裏)

なふに甚よろこびきをやる
事、中としまのはたらき
に同じ。

求配方

此方は、あい見んと思ふ女の
身に弾かけ、その女のね所の
方へ向ひてねべし。夜ふけ
人しつまりて、その女來りて、
物いわずにふところの内へ入
事、うたがひなし。その時、

(艶葉奇方第十二丁表)

立功丸を用ひて行ふべし。
しりをもちあげ、腰をふり
こなゆすりをし、淫水なが
るゝかことし。

不倒方

三丸、かん酒にてのむへし。

行へば、未男に逢はざる少女
も子宮を開き、一物の出
入り年増の如く、初めて行

ふに甚だ喜び氣を遣る
事、中年増の働き
に同じ。

求配方

此方は、相見んと思ふ女の
身に弾かけ、その女の寢所の
方へ向ひて寝べし。夜更け
人静まりて、その女來りて、
物言はずに懷の内へ入る
事、疑ひ無し。その時、

立功丸を用ひて行ふべし。
尻を持ち上げ、腰を振り
子な揺りをし、淫水流
るるが如し。

不倒方

三丸、爛酒にて飲むべし。

よもすから精を洩す事、
いか程つよき女もつかればて、
どのやうにかうしやにかたく
まもるミちのものも、中く

(艶薬奇方第十二丁裏)

たもつ事あたはず、ひたくと
いたき付、えならぬこゑを出
行義取ミだし、淫水溢
なかれて地女のごとし。

遍宮子

毎日一粒ツ、すきはらに
かん酒にて用ふ。尤、一廻り
七日の間玉莖を絹にて
つゝミ、かたくまもりて交接を
忌、七日過て任意に行ふ。

(艶薬奇方第十三丁表)

玉莖黒金のこことく、百戦
するともつかれたをるゝ事
なく、満宮の女を行ふに
足れり。此故に、遍く宮
女を行ふといふこゝろにて、

よもすから精を洩す事、
如何程強き女も疲れ果て、
どのやうに強者に堅く
守る道の者も、中々

保つ事能はず、ひたひたと
抱き付き、えならぬ聲を出し
行義取り亂し、淫水溢れ
流れて地女の如し。

遍宮子

毎日一粒づつ、空き腹に
爛酒にて用ふ。尤、一廻り
七日の間玉莖を絹にて
包み、堅く守りて交接を
忌み、七日過て任意に行ふ。

玉莖黒金の如く、百戦
するとも疲れ倒るる事
無く、満宮の女を行ふに
足れり。此故に、遍く宮
女を行ふと謂ふ意にて、

遍宮子と名付たり。即漢
の武帝の製したまふ所
の奇方なり。秘中の秘
なり。
潤戸方

(艶薬奇方第十三丁裏)

煎じあたゝめ、玉門を度々
あらふべし、其味言葉
に述べ難し。

青娥圓

腎虚し、たち居に眩暈
し、陽事起らず飲食
を絶し、死に至らんとする
とも、三十九ツ、すきはらに
炊湯にて用ゆれば、腎水湧
出で、盛壯になる事、神のごとし。

(艶薬奇方第十四丁表)

右の諸方、製調の秘事、
口訣悉く左にあらわす。
能く、其製造を誤る事有
べからず。製を誤る時は、

遍宮子と名付たり。即ち漢
の武帝の製し給ふ所
の奇方なり。秘中の秘
なり。
潤戸方

煎じ温め、玉門を度々
あらふべし、其味言葉
に述べ難し。

青娥圓

腎虚し、立ち居に眩暈
し、陽事起らず飲食
を絶し、死に至らんとする
とも、三十九ツ、空き腹に
炊湯にて用ゆれば、腎水湧
出で、盛壯になる事、神の如し。

右の諸方、製調の秘事、
口訣悉く左に著す。
能く、其製造を誤る事有
べからず。製を誤る時は、

験を得る事あたはず。

春意奇方

製造秘訣

左に記す所の諸方、古
き巻を閲するごとに、
拾ひあつむる名方なり。
ひろ 久しく帳中に秘して、
ひさ 他見を許さずといへ共、
たけん 誠まことに玉たまを泥でいちゆう中に投たうずる
にひとしく、いつか公おほやけに
すべしもあらぬ事

なるに、好事の人
有て、世に弘ひろめん事を乞こふ。即すなはち
艸稿さうかうして投たうず。さわあれ、

(艶薬奇方第十四丁裏)

験を得る事能はず。

春意奇方

製造秘訣

左に記す所の諸方、古
き巻を閲する毎ごとに、
拾ひ集あつむる名方なり。
ひろ 久しく帳中に秘して、
ひさ 他見を許さずといへ共、
たけん 誠まことに玉たまを泥でいちゆう中に投たうずる
に等ひとしく、何時いつか公おほやけに
すべしもあらぬ事

なるに、好事の人
有て、世に弘ひろめん事を乞こふ。即すなはち
艸稿さうかうして投たうず。さはあれ、

製法を誤らば、しるし
もとの事なし。却つて、
後人の謗をおそる。爰に
おゐて、製法の秘訣を
拙き筆に書あらはして、
二十三方の神効を施
ものならずし。

邵陽丸

邵陽魚胆

硫黄

右、黄鱈魚の肚の内に入、

鉄線をもつてよく結ひ、

鱈魚の枯乾するを待て、

硫黄をとりだし、ふたゝひ

邵陽魚胆

九昇附子

甘松

麝香

何れも極細末し、雀腦

一箇ひとつ和名未詳

二兩

(春意奇方第二丁裏)

製法を誤らば、驗
もとの事無し。却つて、
後人の謗を畏る。爰に
於て、製法の秘訣を
拙き筆に書著して、
二十三方の神効を施す
ものならずし。

邵陽丸

邵陽魚膽

硫黄 (イワウ)

右、黄鱈魚 (タウナギ) の肚の内に入れ、

鉄線を以てよくよく結ひ、

鱈魚の枯乾するを待ちて

硫黄を取り出し、再び

邵陽魚膽

九鼎附子 (九回修治したト)

甘松 (キスの根莖)

麝香 (ジャカウジカの雄)

何れも極細末し、雀腦

一箇ひとつ和名未詳

二兩

(春意奇方第二丁裏)

(春意奇方第二丁表)

一錢四分

髓ずいをもつて丸となし、

黄豆おうとうの太おのごとく用る。

ことに、〇かくのごとし。セウ

ちうにてのむ。功能かうのう、右みぎに出い

すによつて、ふたゝび爰こゝに

述のす。下しもこれにならへ。

百戰丹ひやくせんたん

黄狗胆かうくたん

麝香じやくかう

龍骨りうこつ

海螵蛸かいひやうせう

おのく等分とうぶん

右みぎ、末まつとなし、狗胆くたんの内うち

に入いれ、かげほしにし、また

細末さいまつとし、飯めしのりにて丸

し、菘豆りよくとうの太おのごとく、

用もちふる時とき、一粒りつぶツゝ口くちにふくむ。

興陽丹かうやうたん

(春意奇方第二丁裏)

髓ずい（スズメ）を以もつて丸と爲し、

黄豆おうとう（大豆）の太おの如ごとく用ふる。

殊ことに、〇此かくの如ごとし。焼きやう

耐ちやうにて飲のむ。功能かうのう、右みぎに出い

すに因よつて、再ふたび爰こゝに

述のす。下しもこれに倣ならへ。

百戰丹ひやくせんたん

黄狗膽くわくたん（毛毛が黄色きいろの犬いぬの肝きも）

麝香じやくかう

龍骨りうこつ（太古たいこの哺乳ほにゅう）

海螵蛸かいへうせう（カファイカ）

各おの等分とうぶん

右みぎ、末まつと爲し、狗膽くたんの内うち

に入いれ、陰干かげほしにし、また

細末さいまつとし、飯糊めしのりにて丸

し、菘豆りよくとう（綠豆）の太おの如ごとく、

用もちふる時とき、一粒りつぶづつ口くちに含ふむ。

興陽丹かうやうたん

(春意奇方第三丁表)

雄狗胆 いろうくだん 一ケ
麝香 じやかう 一錢

右、じやかうをもつて狗胆
の内に入、よくく結、風の
あたる所にかげ陰干にし、
少ツ、玉莖の頭につけて
用ゆ。

鉄鎗丸 てつそうがん
人龍 じんりゆう 一條

(春意奇方第三丁裏)

かはらの上にてあぶり、
苦瓜子 くくわし 十五
乳香 にゅうかう 五分
沒藥 もつやく 五分
杏仁 きやうにん 七ケ
よくくあぶらをさり、
射香 じやかう 五分
龍腦 りうのう 五分
右、細末し、のりにて丸し、
麥粒の大サにし、行ふ時に

(春意奇方第四丁表)

雄狗膽 いろうくだん (雄の肝) 一ケ
麝香 じやかう 一錢

右、麝香を以て狗膽
の内に入、よくく結ひ、風の
あたる所にかげ陰干にし、
少しづつ玉莖の頭につけて
用ゆ。

鉄鎗丸 てつそうがん
人龍 じんりゆう (クワチウ) 一條

瓦の上にて焙り、
苦瓜子 くくわし (ニガウリ) 十五
乳香 にゅうかう (カンラン科ボスウエ) 五分
沒藥 もつやく (ムクロジ目カンラン科コン) 五分
杏仁 きやうにん (アンズ) 七ケ
よくよく油を去り、
射香 じやかう 五分
龍腦 りうのう (リュウノウジュの精) 五分
右、細末し、糊にて丸し、
麥粒の大きさにし、行ふ時に

玉門ぎよくもんの中へ、一粒を入れて
行ふべし。

雙美丹さうびたん

五味子ごみし 五分

遠志えんじ 五分

龍腦りゅうのう 五分

龍骨りゅうこつ 五分

いづれも、よくよく細末さいまつし、

少しツゝつばきにてねり、

玉門ぎよくもんのうちに入るなり。

玉連環ぎよくれんぐわん

雄狗膽いুকたん 一ケ

肉従容にくじゆよう 二朱

よき酒さけにひたし、かわかし、

かハラけてよくあぶりて

粉こなにするや。

紫梢花しせうか 五分

硫黄いわわ 一分

韭子きょうし 十

右、いづれも細末さいまつし、胆汁きものしるを

(春意奇方第四丁裏)

玉門ぎよくもんの中へ、一粒を入れて
行ふべし。

雙美丹さうびたん

五味子ごみし (チヨウセンゴミシ及
びサネカズラの果實)

遠志えんじ (イトメハギの根
もしくは根皮)

龍腦りゅうのう

龍骨りゅうこつ

何れも、よくよく細末さいまつし、

少しづつ唾つばきにて練ねり、

玉門ぎよくもんの内うちに入るなり。

玉連環ぎよくれんぐわん

雄狗膽いুকたん

肉従容にくじゆよう (ホンオニク
の肉質莖)

よき酒さけに浸ひたし、乾かわかし、

土器かほらけにてよく焙あぶり

粉こなにするや。

紫梢花しせうか (淡水カイメンの一種
を乾燥させたもの)

硫黄いわわ

韭子きょうし (ニラの種子)

右、何れも細末さいまつし、膽汁きものしるを

五分 五分 五分 五分 五分 一ケ 二朱 五分 一分 十

(春意奇方第五丁表)

うつわ物に入、粉薬こくすりを入
 とくとかきませ、風かぜのあたる
 所につりをき、四十九日の
 間かけほしにし、行おこなふ
 時に一分ツゝつばきにてねり、
 茎ききのかしらにぬりて事
 を行ふなり。
 窄陰子さいいんし
 没石子もつせきし 三ヶ
 干姜かんきやう 二朱
 升麻しやうま 一朱
 狗骨くこつ 一朱
 肉桂にくけい 一朱
 いつれもよく細末し、ねり
 ミつにて丸し、梧桐子ことうしの
 大サのごとく、用ゆる度たびに一粒りゅう
 ズゝつはにとゝのへ、玉門りゅうに入て、
 ねつするをまちて事を
 おこなふ。ねつせざるうち

(春意奇方第五丁裏)

器物うつはに入れ、粉薬こくすりを入れ
 特とくと掻かき混ぜ、風かぜの當あたる
 所に吊り置き、四十九日の
 間陰干かげほしにし、行おこなふ
 時に一分づつ唾つばきにて練ねり、
 茎ききの頭かしらに塗ぬりて事
 を行ふなり。
 窄陰子さいいんし
 没石子もつせきし 三ヶ
 干姜かんきやう (干シヨワガの根莖を) 二朱
 升麻しやうま (サラシナシヨウマ) 一朱
 狗骨くこつ (イヌ科イ) 一朱
 肉桂にくけい (クスノキ科ケイ及びそ) 一朱
 何れもよく細末し、練ねり
 蜜みつにて丸し、梧桐子ことうしの
 大きさの如ごとく、用ゆる度たびに一粒りゅう
 づつ唾つばに調ととのへ、玉門りゅうに入れて、
 熱ねつするを待ちて事を
 行ふ。熱ねつせざる内うち

行へば、しるしなし。

(春意奇方第六丁表)

長想子

定粉

蛇床子

狗骨

狗骨をしらやきにし、

外いづれもさいまつし、すこし

つゝ行ふとき、玉門にも入、

又は茎のかしらにもぬりて、

しはらくして事を行ふ

べし。

(春意奇方第六丁裏)

浴炉方

松香

甘松

陳皮

薄荷

五味子

蛇床子

朴硝

一朱

一朱

八分

五分

五分

一朱

七分

行へば、しるしなし。
驗無し。

長想子

定粉 (鹽基性)
(炭酸鉛)

蛇床子 (オカゼリ)
の果實)

狗骨

狗骨を白焼きにし、

外何れも細末し、少し

つゝ行ふ時、玉門にも入れ、

又は茎の頭にも塗りて、

少頃して事を行ふ

べし。

浴爐方

松香 (松ヤニから精油を)
除いて得た樹脂)

甘松

陳皮 (ウンシユウミカンの成熟)
した果皮を乾燥したもの)

薄荷 (ハツカの葉を)
乾燥したもの)

五味子

蛇床子

朴硝 (含水硫酸ナトリウム、無水硫酸ナトリ
ウム、或いは、含水硫酸マグネシウム)

一朱

一朱

八分

五分

五分

一朱

七分

二朱

一朱

一朱

右、水二升入、ねぎ二本
根葉ともに入、せんじ

あたゝめ、玉門をあらひて、
よくくしめりをぬぐひ
さりてのち、おこなふて
はなはだしるしあり。

貼臍膏
陽起石 一朱
蛇床子 一朱
香附子 一朱
韭子 一朱
大風子 五分

からをさり、ミばかりを常
のことくせいし用ゆ。

土狗 七ケ
むね、あし、てをさりてやき、
粉にして、

射香 五分
硫黄 五分

(春意奇方第七丁表)

右、水二升入れ、葱二本
根葉共に入れ、煎じ

あたた
温め、玉門を洗ひて、
よくよく湿りを拭ひ
去りて後、行ふて
甚だ驗有り。

貼臍膏
陽起石 (透角閃石) 一朱
蛇床子 一朱
香附子 (ハマスゲ) 一朱
韭子 一朱
大風子 (イイギリ科
の木の種子) 五分

からを去り、實ばかりを常
の如く製し用ゆ。

土狗 (昆蟲のケラ) 七ケ
胸、足、手を去りて焼き、
粉にして、

麝香 五分
硫黄 五分

(春意奇方第七丁裏)

右、いづれもよくさいまつに
し、ねりミつにてねりて
丸じ、指のかしらほどニ

(春意奇方第八丁表)

して、臍の中一入、あぶら
かミをもつてふたとし、

きぬを手ぬぐひのこことく
にたゝミて、ふたのうへを

おゝひ、ほそき帯にて

ゆひさだめ、しつかりと薬を
おさへ、とけぬやうにして

事を行ふ。

双美方

龍骨

(春意奇方第八丁裏)

一朱

胡榘

姜蚕

章腦

枯凡

いづれも細末し、少し
づゝつわてねり、玉門のうち

右、何れもよく細末に
し、練蜜にて練りて
丸じ、指の頭程に

して、臍の中一入れ、油

紙を以て蓋とし、

絹を手拭ひの如く

に疊みて、蓋の上を

覆ひ、細き帯にて

結び定め、確りと薬を

押さへ、解けぬやうにして

事を行ふ。

双美方

龍骨

一朱

胡榘 (胡椒のここと。コ)

姜蚕 (白癩病で死亡したカイ)

章腦 (クスノキから抽)

枯凡 (焼いたものを)

何れも細末し、少し

づつ唾で練り、玉門の内

一朱 一朱 一朱 七分

に入、また莖くきのかしらにぬりて、ずいぶんころろしつかに事を行ふて、薬氣くすりのきのめぐるをまつへし。

(春意奇方第九丁表)

立功丸りつこうがん

石燕せきえん 二ツ

火にやきて、粉にし、

海馬かいば 一双さう

これもやきて、粉にし、

龍骨りゅうこつ 二朱

木香 三朱

丁香 三朱

右、いづれも細末し合て、

少しツゝすきはらにのミ、

(春意奇方第九丁裏)

何にて、しめりけのなきかわきたる物をくひて、くすりをおさへ、また、玉門にもすこしつきにてとき入、しはらくしておこなふべし。

に入れ、また莖くきの頭に塗りて、随分ずいぶん心静ころしづかかに事を行ふて、薬氣くすりのきの運めぐるを待まつべし。

(春意奇方第九丁裏)

立功丸りつこうがん

石燕せきえん (鼈足類のキルトスビ)

火に焼やきて、粉にし、

海馬かいば (ゴツノオトシ)

これも焼やきて、粉にし、

龍骨りゅうこつ

木香(キク科のSantalum)

丁香(チヨウジン)

右、何れいづれも細末し合せて、

少しづつ空すき腹はらに飲のみ、

何にて、湿しめり氣けの無なき乾かわきたる物を食くひて、薬くすりをおさへ、また、玉門にも少しつきにて溶とき入れ、少頃すこし睡すにて行おこなふべし。

二ツ

一雙さう

二朱

三朱

三朱

固精丸
こせいくわん

肉従容
にくじゆうよう

五朱

酒にひたし、あらたなる

かからのうへにてあぶり、

かハかし細末するなり。

(春意奇方第十丁表)

兔絲子
ともし

五朱

栝子仁
くわしにん

五朱

青塩
せいえん

一朱五分

地黄
ぢわう

二朱

酒にひたし、あたらしき

瓦のうへにてあぶりて

細末す。にくじゆうようと

同じせいほうなり。

桂心
けいしん

三朱

五味子
ごみし

二朱

(春意奇方第十丁裏)

牛膝
ごせき

二朱

遠志
えんじ

二朱

蛇床子
ぢやしょうし

二朱

右、いづれも極細末にし、

固精丸
こせいくわん

肉従容
にくじゆうよう

五朱

酒に浸し、新たなる

瓦の上にて焙り、

乾かし細末するなり。

兔絲子 (マメダオン、ネナンカズラ及び
Convolvulaceae epilinum Wight の成熟種子)

栝子仁 (コノテガン)

五朱

青塩 (湖の鹽水)

五朱

地黄 (ハマウンボ科ジオ
ツ屬の植物の根莖)

一朱五分

酒に浸し、新しき

瓦の上にて焙りて

細末す。肉従容と

同じ製法なり。

桂心 (クスノキ科ケイ及びその他同屬の
植物の樹皮の外皮を除いたもの)

三朱

五味子

二朱

牛膝 (ヒユ科イノコヅ
チ屬の植物の根)

遠志

二朱

蛇床子

右、何れも極細末にし、

二朱

右、いづれも極細末にし、

ねりミつにて丸し、梧桐

子の大のごとくにし、三十

つぶつ、すきはらに、よき酒

をあたくめ、をくり下して

事を行ふ。

壯陽丹

丁香

無名異

五月蚕蛾

これハ、五月中かいこをかひ、

まるをかけ、そのうちより、

ちやうといふむし出る。

そのむしのめすおすを

二つがい用ゆる也。

胡椒

桂心

木香

右、いつれも細末して、

梧桐子の大に丸し、常

二朱

五分

一朱

(春意奇方第十二丁表)

練蜜にて丸し、梧桐

子の大の如くにし、三十

粒づつ、空き腹に、良き酒

を温め、送り下して

事を行ふ。

壯陽丹

丁香

無名異

五月蠶蛾 (カヒロの成蟲の

これは、五月中蠶を飼ひ、

繭をかけ、その内より、

蝶と言ふ蟲出る。

その蟲の雌雄を

二つがい用ゆる也

胡椒

桂心

木香

右、何れも細末して、

梧桐子の大に丸し、常

二朱

五分

一朱

く用ゆるにせうがゆ、尤
ねしなにのみくだし、

また玉門のうちへいれる也。

牽情方

牡丹花

天仙茄子花

天仙子

一両

一両

三朱

右の三味、しごくこまかに

末し、さけあるひは茶、

その外何によらず、のみ

物くい物のうちへ、人の知

ざるやうにそとはじき

入て、婦人にあたふる也。

娑情散

蟬酥

胡椒

肉桂

二朱

二朱

五分

射香

をのく細末となし、

一分

(春意奇方第十二丁表)

々用ゆるに生薑湯、尤

寝しなに飲み下し、

また玉門の内へ入れる也。

牽情方

牡丹花 (ボタンの花)

天仙茄子花 (ケチヨウセンアサガオの花及び)

天仙子 (ケチヨウセンアサガオの種子)

一両

一両

三朱

右の三味、至極細やかに

末し、酒或いは茶、

その外何によらず、飲み

物食ひ物の内へ、人の知

ざるやうにそと弾き

入れ、婦人に與ふる也。

娑情散

蟬酥 (蟬酥のこと。シナヒキガエル等の毒腺の分泌物を乾燥したもの)

胡椒

肉桂

二朱

二朱

五分

射香

おの各々細末と爲し、

一分

(春意奇方第十二丁裏)

二三厘ツゝをもつて、

つはきにとゝのへ、ひるの八ツ

まへ、午の下刻のころに、

よき茶にてたまききを

あらひかハかし、そのうへ

にすりぬりをき、事を

行ハんとおもふとき、よく

くあらひたり、ぬくひて

かハかし行ふべし。

浴盆湯

細辛 一兩

川樹 一兩

蛇床子 一兩

梨花 一兩

甘草 二朱

茱萸 一兩

附子 一兩

右、いづれも細まつとし、

水五はい入、こくせんじ、

(春意奇方第十三丁表)

二三厘づつを以て、

唾に調へ、晝の八つ

前、午の下刻の頃に、

よき茶にて玉莖を

洗ひ乾かし、その上

に擦り塗り置き、事を

行ハんと思ふ時、よく

よく洗ひたり、拭ひて

乾かし行ふべし。

浴盆湯

細辛 (ウマノズクサ科サイシン)

川樹 (四川産のサンシヨ)

蛇床子

梨花 (ナシの花)

甘草 (ナンキンカンゾウ及び)

茱萸 (山茱萸であればハルコガネバナの、呉茱萸であればゴシユ)

附子 (トリカブ)

右、何れも細末とし、

水五杯入れ、濃く煎じ、

一兩 一兩 一朱 一兩 一兩 一兩 一兩

(春意奇方第十三丁裏)

ねぎを手一そくに一に
ぎり、つきたゝらかして、
ミギの中へ入、ミつを
よきほとにさして、
風のあたらぬところニ
て、おとこおんなともニ、身を
きよめあらふべし。

秘妙散
母丁香 一粒

山柎 八粒
細辛 一朱
海礫硝 二朱
龍骨 二朱
枯凡 少
右、ミつにあはせ、ようく
ねりて丸となし、
梧桐子の大きさにして、
おこなふとき、一りうツゝ、
玉門のうちへ入るゝ也。

(春意奇方第十四丁表)

(春意奇方第十四丁裏)

葱を手一束に一握
り、搗き爛かして、
右の中へ入れ、蜜を
よき程に差して、
風の當らぬ所に
て、をとこおんなとも
清め洗ふべし。

秘妙散
母丁香 (チヨウジツ)

山柎 (サンシヨウ) 八粒
細辛 一朱
海礫硝 (海礫硝) 二朱
龍骨 二朱
枯礬 少
右、蜜に合はせ、ようよう
練りて丸と爲し、
梧桐子の大きさにして、
行ふ時、一粒づつ、
玉門の内へ入るゝ也。

一粒
八粒
一朱
二朱
二朱
少

たがひに心よき事、能書

に述るがごとし。

求配方

藿香 一朱

三奈 一朱

川芎 一朱

丁香 一朱

射香 五分

臍具狐心 一尾

本書に一尾上焙干存性

とあり。按ずるに、瓦の字

なるべきを誤りて、尾の字

に作るならん。狐の字より

てうして、尾字にあやまる

も、縁なきにもあらず。しかれ共、

狐心一つ瓦上にあぶりかわ

かし、となして見るがよし。

此臍具狐心、いまだつまひらか

ならず。狐心は、きつねの

心なり。智者の考を待つ。

(春意奇方第十五丁表)

互ひに心よき事、能書

に述るが如し。

求配方

藿香 (パチヨリ) の全草

三奈 (パンウコ) ンの根莖

川芎 (センキユウの根莖を湯) 通して乾燥させたもの

丁香

射香

臍具狐心 (不詳)

本書に一尾上焙干存性

とあり。按ずるに、瓦の字

爲るべきを誤りて、尾の字

に作るならん。狐の字より

調じて、尾字に誤る

も、縁なきにも非ず。然れ共、

狐心一つ瓦上に焙り乾

かし、となして見るがよし。

此の臍具狐心、未だ審らか

ならず。狐心は、狐の

心なり。智者の考を待つ。

一尾 五分 一朱 一朱 一朱 一朱

(春意奇方第十五丁裏)

右、極細末とし、少ばかり
婦女の上にはぢきかくる
なり。

不倒方

丁香

姜蚕

海馬

一双とは、女をとこ一対
の事なり。

陽起石

三朱

木香

三朱

乳香

三朱

乾葱

二根

即ち成したるひともし

二本なり。

いつれもよくよく細末と

なし、めしのりに酒

を少しうち、よくねり

合せ、梧桐子の大に丸ん

(春意奇方第十六丁表)

右、極細末とし、少し許り
婦女の上に弾きかくる
なり。

不倒方

丁香

姜蚕

海馬

一雙とは、女と男一対
の事なり。

陽起石

三朱

木香

三朱

乳香

三朱

乾葱 (ネギを乾燥)

二根

即ち成したる一文字

二本なり。

何れもよくよく細末と

爲し、飯糊に酒

を少し打ち、よく練り

合せ、梧桐子の大に丸ん

じ、一度に三りうづゝ、

あたゝめ酒にてのみくだす
べし。

(春意奇方第十六丁裏)

遍宮子

此方ハ、漢の武帝の詔

にて、良工國手をあつめ、

考へしめたる所の奇

方なり。

川芎

木香

山梔子

薄荷

細辛

天麻

白芷

防風

芦頭をさりて、

皮をむき、

あぶりて用ゆ。

二朱五分

(春意奇方第十七丁表)

じ、一度に三粒づつ、

あたゝめ酒にて飲み下す
べし。

遍宮子

此の方は、漢の武帝の詔

にて、良工國手を集め、

考へしめたる所の奇

方なり。

川芎

木香

山梔子 (クナナシ
の種子)

薄荷

細辛

天麻 (オニノヤガラ
の根莖の外皮を
去り湯通し乾燥させたもの)

白芷 (ヨロイゲ
の根)

防風 (ボウフウの
根及び根莖)

芦頭を去りて、皮を剥き、

焙りて用ゆ。

砂仁

(シヨウガ科ヨウシユクシヤ
属の植物の種子の塊)

二朱五分

しやうしきなごをよく
さり用ゆべし。

(春意奇方第十七丁裏)

右、細末となし、煉ミつで
ねり合せ、丸しらるゝ程の
か減にし、かけ目一兩ツゝに
かけわけ、その一兩を二十粒
ツゝに丸するなり。たとい何
ほどありとも、右のわり合を
かんがへ、一兩の目かたにて、数
二十粒ツゝの積りをもつて
丸ずべし。用やうは、一度
に一りうツゝ、すきはらの時

(春意奇方第十八丁表)

さけをあたゝめ、酔ほどに
のむ也。かくのごとく、毎日
二三とツゝ、七日のあいた用。
用ゆるうちハ、きぬのふくろを
こしらへ、玉莖を入しかと
ゆいをき、一向に房事を
行ふ事をつゝしミ、かた

焼し核子をよく
去り用ゆべし。

(春意奇方第十七丁裏)

右、細末と爲し、煉蜜で
練り合はせ、丸しらるる程の
加減にし、掛け目一兩づつに
掛けわけ、その一兩を二十粒
づつに丸するなり。譬ひ何
程有りとも、右の割合を
かんがへ、一兩の目かたにて、敷
二十粒づつの積りを以て
丸ずべし。用やうは、一度
に一粒づつ、空き腹の時

(春意奇方第十八丁表)

酒を温め、酔ふほどに
飲む也。此の如く、毎日
二三度づつ、七日の閒用ゆ。
用ゆる内は、絹の袋を
拵へ、玉莖を入れ確と
結び置き、一向に房事を
行ふ事を慎み、堅く

守りて、七日をすごして
のち、いかやうにもこゝろのまゝ
に事を行ふべし。

(春意奇方第十八丁裏)

數十女とたゝかふとも、金鎗
のごとく、たをるゝ事なし。

よつて、宮女をあまねく

御する、といふこゝろをもつ

て、遍宮子と名づく。古

今比類なき名方なり。

潤戸方

石榴皮

黄菊花

白凡

三朱

三朱

二朱五分

(春意奇方第十九丁表)

右三味、よくきざみあはせ、

水二舂を入、文火とて、

やはらかなるすミ火にて、

ゆるくとせんし、二

舂の水を一舂にせん

じつめ、よきほどさまし、

守りて、七日を過して
後、如何やうにも心の儘
に事を行ふべし。

(春意奇方第十八丁裏)

數十女と戦ふとも、金鎗
の如く、倒るる事無し。

因て、宮女を遍く

御する、と謂ふ意を以

て、遍宮子と名づく。古

今比類無き名方なり。

潤戸方

石榴皮

黄菊花

白礬

三朱

三朱

二朱五分

右三味、よく刻み合はせ、

水二舂を入れ、文火とて、

軟らかなる炭火にて、

ゆるゆると煎じ、二

舂の水を一舂に煎

じつめ、良き程冷し

すこしあつきくらいにし、
玉門ぎよくもんをあらふ。かくのごとく
する事たびくたびくにして、
玉門ぎよくもんのあたゝかなる事を

(春意奇方第十九丁裏)

おぼゆるなり。そのとき事
を行をこなふ。そのよきこと、いゝ尽
すべからず。

右みぎの一方ほうは、姉だう姫き潤じゆんこの
方ほうにて、いんいんのちちう王わうを悦
ばしめし所ところの名めい劑ざい也。
秘ひして金きん匱きにありし
を、世ひろに弘ひろめて閨けい中ちゆうの珍ちん
とす。

青娥せい圓えん

此方、陶真人たうしんじんより傳ふ

る所の仙方せんぽうにして、
淫欲いんよくを過すごし腰膝こしひざ
いたミ、いきされし歩行ほかう
かなはず、のミくひすゝます、

(春意奇方第二十丁表)

少し熱あつきくらゐにし、
玉門ぎよくもんを洗あらふ。此かくの如ごとく
する事度々たびたびにして、
玉門ぎよくもんの暖あたかなる事を

覺おぼゆるなり。その時とき事
を行をこなふ。その良よきこと、言いひ盡
すべからず。

右みぎの一方ほうは、姉だう姫き潤じゆんこの
方ほうにて、殷いんの紂ちゆう王わうを悦
ばしめし所ところの名めい劑ざい也。
秘ひして金きん匱きにありし
を、世ひろに弘ひろめて閨けい中ちゆうの珍ちん
とす。

青娥せい圓えん

此方、陶真人たうしんじんより傳ふ

る所の仙方せんぽうにして、
淫欲いんよくを過すごし腰膝こしひざ
痛みいた、息切いきぎれし歩行ほかう
適かなはず、飲のみ食くひ進すすまず、

いろあしく遍へん身しんうそ腫はれ、
盗汗ねあせいでよるひるね

ふられず、物ごとてごといさみ
なく、交接てじとのきざし
なきも、これを服かすれば、

諸症しよじやうごとくくいへて、

宗筋まらおへる勃起おん事神妙也。

破故帨はこし 一兩

土器かへらけにて炒いりて用。

杜仲とちゆう 五朱

剉碎きざみくだき、かわらけにて炒いりて、

いとのことくなるものをいり

つくし、黄色きいろならし

め、細末さいまつすべし。

核桃肉かくたうにく 五十

よくあらひきよめ、皮かを

さり、日ひにほしかわかし、

きざみ細末さいまつすべし。

但し、火ひを忌いむなり。

(春意奇方第二十二丁裏)

色悪いろあしく遍へん身しんうそ腫はれ、
盗汗ねあせ出でで夜晝よるひる寢ね

ぶられず、物事ものごと勇いさみ
なく、交接てごとの兆きざし
なきも、これを服かすれば、

諸症しよじやう盡ことごとく癒いえて、

宗筋まらおへる勃起おん事神妙也。

破故紙はこし (オランダビユ
の成熟種子)

土器かへらけにて炒いりて用ゆ。

杜仲とちゆう (トチユウ
の樹皮)

剉きざみ碎くだき、土器かへらけにて炒いりて、

糸いとの如ごとくなるものを炒いり

盡つくし、黄色きいろならし

め、細末さいまつすべし。

核桃肉かくたうにく (クルミ
の核仁)

よく洗あらひ清きよめ、皮かを

去きり、日ひに干ほし乾かわかし、

刻きざみ細末さいまつすべし。

但し、火ひを忌いむなり。

一兩

五朱

五十

右三味、細末かけ合あはせ、めし
のりにて梧桐子ごとうしの大きさの
ごとくに丸ぐんし、一度に三
十粒じゅうりゅうつ、空すまはら心に炒米湯いりこめゆ
にて用ゆるなり。
右みぎに出いす二十三方いは、神しん

(春意奇方第二十二丁裏)

人道土じんどうしの蘊うん奥おくをさぐり、
漢かんの武帝ぶていより唐たうの玄宗げんそう
にいたるまでの春意奇方しゆんいきほうを
撫ひろひ、就中靈妙なかんづくれいみゆうをこゝろ
みたる諸方しよほうを、好事家かうずかに
秘藏ひそうせり。是これを乞こひ求めて
梓あづさに鏤ちりばむ。かろくしく玩くわん
弄ろうする事ことなかれ。穴賢あなかしこ。

(春意奇方第二十二丁表)

右三味、細末かけ合あはせ、飯めし
糊のりにて梧桐子ごとうしの大きさの
如ごとくに丸がんし、一度に三
十粒じゅうりゅうつ、空すまはら心に炒米湯いりこめゆ
にて用ゆるなり。
右みぎに出いす二十三方いは、神しん

人道土じんどうしの蘊うん奥おくを探さぐり、
漢かんの武帝ぶていより唐たうの玄宗げんそう
に至いたるまでの春意奇方しゆんいきほうを
撫ひろひ、就中靈妙なかんづくれいみゆうを試こころ
みたる諸方しよほうを、好事家かうずかに
秘藏ひさうせり。是これを乞こひ求めて
梓あづさに鏤ちりばむ。軽々かるがるしく玩くわん
弄ろうする事こと勿なかれ。穴賢あなかしこ。

